

老年医学の架け橋：ノースカロライナ州立大学と名古屋大学のコラボレーション

藤沢 知里^{1)2)*} 坂井 智達^{1)3)*} 井上 愛子⁴⁾ 梅垣 宏行¹⁾⁴⁾

(日老医誌 2026 ; 63 : 73-77)

概 略

ノースカロライナ州立大学 (North Carolina State University, NC State) は、ノースカロライナ州に所在する 17 の州立大学の一つであり、特に工学および農学分野において国際的に高い評価を受ける、州内の中核的研究大学である。名古屋大学と NC State との学術交流の歴史は古く、1985 年に学術交流協定が締結されて以来、2025 年で 40 周年を迎える。2008 年には、名古屋大学が海外における技術移転活動の拠点として、Technology Partnership of Nagoya University, Inc.(NU Tech) をノースカロライナ州リサーチ・トライアングル・パーク (Research Triangle Park : RTP) 近郊に設立した。RTP は、ノースカロライナ州立大学、デューク大学、ノースカロライナ大学チャペルヒル校を結ぶ地域に位置し、アメリカ東海岸を代表する高等教育機関および研究機関が集積する世界有数の学術・研究拠点である。NU Tech はノースカロライナ州非営利活動法人法に基づき設立された NPO 法人であり、現在は名古屋大学職員 2 名が常駐し、現地大学の技術移転部門や関連支援組織と連携して国際的な技術移転活動を展開している。

このような長年の連携関係を基盤として、2024 年にはノースカロライナ大学老年内科の John A. Batsis 医師を中心に、名古屋大学老年内科学の梅垣宏行教授との協働による日米老年医学分野の交流促進プロジェクトが、国際交流基金の助成を受けて開始された。本プロジェクトは、両国の老年医療専門職の相互理解を深め、教育・臨床・研究面での国際的連携を促進することを目的とし

ている。

2025 年 10 月 13 日から 18 日にかけて、名古屋大学大学院医学系研究科 老年内科学の教員・医師らが、ノースカロライナ大学 (University of North Carolina) を訪問し、学術交流プログラムを実施した。本プログラムでは、老年医学領域における国際的視野の拡大および共同研究の推進を目的として、研究者間の意見交換や教育プログラムの共有が行われた。また、ノースカロライナ州内に所在する多様な高齢者ケア施設を視察し、医療から生活支援まで包括的なケアを提供するリハビリテーション施設、デイケアセンター、短期ケア (short-term care)、長期ケア (long-term care) ユニット等の現状について理解を深めた。これらの訪問を通じて、地域包括ケアの実践、医療・介護連携の在り方、民間主導型ケアモデルなど、日米の老年医療制度における相違点および共通課題について多くの知見が得られた。

なお、本プログラムには、名古屋大学大学院医学系研究科 国際保健医療学・公衆衛生学分野の八谷寛教授、医学教育学・国際連携室の Itzel Bustos 講師、さらに卓越大学院プログラム (CIBoG) に所属する教員および大学院生も同行し、学際的観点からの意見交換を行うことで、より広範な学術的交流が実現した。

本報告では、当該プログラムにおける主な訪問内容および得られた知見について概説し、今後の国際共同研究および教育連携の発展に資する示唆を提示する。

* equally contribution

- 1) 名古屋大学地域在宅医療学老年科学教室
 - 2) 国立長寿医療研究センター予防科学研究部
 - 3) 九州大学大学院医学研究院地域医療教育ユニット
 - 4) 名古屋大学未来社会創造機構ナノライフシステム研究所
- doi: 10.3143/geriatrics.63.73



日本の高齢者医療について講義される梅垣教授



聴衆の前で挨拶される名大国際保健医療学八谷教授

シンポジウム：学術交流

シンポジウムは、両国の高齢者医療・ケアに関する制度および両大学の Aging 研究の現状を相互に理解し、今後の協働の可能性を探る場として企画された。当日は、日米両大学から研究者が登壇し、医療介護制度の概略や各大学の研究内容について発表を行った。発表は質疑応答を含め発表者1名あたり30分の持ち時間が設定され、3日間にわたり半日ずつのプログラムとして実施され、約60名の参加者ととも活発な議論が展開された。実際のスケジュールは次頁の表に示す通りである。

各日には「Models of Care (ケアモデル)」「Health Care Promotion in Older Adults (高齢者の健康増進)」「Serious Illness Care (重篤疾患のケア)」の大枠となるテーマが設定されており、体系的かつ網羅的な構成であった。医療、介護、コミュニティケア、そしてそれらの連携や移行期ケアまで、高齢者の生活全体を視野に入れた内容であり、参加者として多くの気づきと学びを得ることができた。また、社会学や公衆衛生学など医療以外の専門

分野からの視点も加わり、高齢者ケアを多角的に再考する貴重な機会となった。

Aging に関する多領域の研究が連携している本プログラムならではの取り組みとして興味深かったのは、1日目の「Interdisciplinary Work in Community & Aging」のセッションで紹介されたノースカロライナ大学の「The Carolina Aging Network」である。これは学内外の連携ハブとして構築されたもので、Aging に関する幅広い分野の専門家やプログラムをつなぐ役割を担っている。その中で紹介された「Carolina Aging Directory (<https://aging.unc.edu/directory/>)」は、高齢者医療・老年学に携わる専門家、教育機関、研究センターの情報を網羅し、学術的連携を促進するとともに、地域社会との協働を通じて Aging フレンドリーな社会構築を目指す取り組みである。名古屋にも、名古屋大学を含め高齢者医療・老年学に関する研究機関や専門家が多数存在しており、このような仕組みは非常に参考になると感じた。地域資源を可視化し、連携を促進する基盤は、今後の教育・研究・実践において極めて重要である。

今回のシンポジウムを通じ、日米それぞれの医療介護制度の違いを再認識するとともに、両国が共通して抱える課題も多いことに気づかされた。制度や文化的背景は異なるものの、高齢者の生活の質をいかに支えるかという根本的な問いは共通しており、その解決に向けた取り組みには多くの学びがあった。こうした交流により、両大学間の国際的連携が今後さらに深化していくことが期待される。制度の違いを越えて共通の課題に協働して取り組むことで、新たな知見と実践が創出されることが望まれる。次回の交流や共同研究の発展が期待される。

表 シンポジウムスケジュール

日付	タイトル	日本語訳（著者作成）	発表者（所属）
10/14	Aging & the Family : A Sociologist's Perspective	高齢化と家族：社会学者の視点	Frankenberg (UNC)
	Inpatient Care	入院診療	梅垣（名古屋大学）
	Assisted Living, Nursing Home & Day Care	介護付き住宅・介護施設・デイケア	Zimmerman (UNC)
	Interdisciplinary Work in Community & Aging	地域と高齢化における学際的連携	Lavalley (UNC)
	Rural Health and Aging	地域医療と高齢化	Holmes (UNC)
	Community Comprehensive Care System	地域包括ケアシステム	八谷（名古屋大学）
10/15	Ultrasound Evaluation of Muscle Mass and Quality in Sarcopenia	サルコペニアにおける筋量・筋質の超音波評価	吉子（中京大学）
	Aging & Nutrition	高齢化と栄養	Sawyer (UNC)
	Closed-loop Treatment for Parkinson's Disease	パーキンソン病に対するクローズドループ治療	Sode (UNC)
	Health Promotion in the Community	地域における健康増進	井上（名古屋大学）
	Community-based Exercise Strategies in the U.S.	米国の地域における運動プログラム	Donnelly (UNC)
	Fall Prevention	転倒予防	Mercer (UNC)
10/16	Dementia - Caregivers & Transitions in the Community	認知症：介護者と地域での移行期ケア	Toles (UNC)
	Caregiving in Cancer Patients in Older Adults	高齢がん患者の介護	Kent (UNC)
	Alzheimer & Related Dementia	アルツハイマーおよび関連認知症	Little (Duke)
	Social Aspects of Older Adults with Dementia	認知症をもつ高齢者の社会的側面	藤沢（名古屋大学）
	Skilled Nursing Home Management in Japan	日本における介護施設マネジメント	坂井（九州大学）
	Opportunities & Challenges in Care Coordination	ケア連携における機会と課題	Gilliam & Godfrey (UNC)



左から学術交流で自分の研究や日本の介護について発表する井上先生，坂井先生と Bastis 先生，藤沢

Geriatric tour

シンポジウム後の午後は、老年内科医の日米親睦プログラムの一環として、米国の複数の高齢者ケア関連施設を訪問した。Parkview Health & Rehabilitation では、急性期後のリハビリテーションや慢性期ケアが提供され、医療と介護が包括的に展開されていた。Pittsboro の Program for All Inclusive Care for the Elderly (PACE, Sarah Stoneking 氏らの案内) では、在宅生活の継続を目指した地域包括ケアが実践されており、通所と在宅支援を組み合わせた柔軟な支援体制が印象的であった。さらに、Carolina Meadows Retirement Community (Donna Miller 氏らの案内) では、経済的に恵まれた高齢者が自立支援サービスから介護専用居室まで一貫したケアを享受できる体制が整備されており、富裕層がより快適な老後を送ることが可能である現状を確認できた。一方で、地域に根差したケアの提供に尽力する現場の姿も強く印象に残った。

名古屋大学老年内科では、疾患背景を問わず多様な高齢患者を受け入れ、急性期治療から慢性期への橋渡しまで一貫して担う体制をとっている。一方、Hillsborough Hospital の Hospital-based Dementia Unit (Kim Mourninghan 医師, David Lynch 医師) では、いわゆる ACE Unit (Acute Care for Elders) として急性期医療に特化しつつ、認知症を有する高齢者に対する多職種による包括的ケアが提供される仕組みが整備されていた。急性期治療の質を確保しながら認知機能・生活機能を維持するための介入が病棟内で体系的に行われており、日本の老年内科病棟とは異なる運用を学ぶ貴重な機会となった。4Ms・5Ms が臨床現場でどのように活用されているかを日米で比較検討することで、高齢者医療における医療機能の役割分担および地域連携のあり方を再考する契機ともなった。

また、UNC の高齢者外来 (Geriatric Outpatients Clinic) では、医師が診療のみならず、患者・家族からの電話やメール対応にも多くの時間を割く必要があり、診察室外でのコミュニケーション負担の大きさが印象的であった。外来体制や診療フロー、情報共有方法は日本と大きく異なり、地域での継続的ケアを支える仕組みとして示唆に富む内容であった。これらの視察を通じて、医療提供体制の違いとその背景にある社会的要因を理解する重要な経験を得ることができた。



さらに、UNC のラボツアーとして訪問した Franz 研究室では、運動機能と膝関節炎に関する研究が進められており、特に転倒に至る前段階の身体動作解析に焦点が当てられていた。歩行パターンのわずかな変化や姿勢制御の乱れをセンシング技術により検知し、転倒リスクを早期に把握することを目指す先進的な取り組みである。工学的アプローチと医学的知見が融合した研究であり、転倒予防や高齢者の生活機能維持に大きく寄与することが期待される。エンジニアリングと臨床医学の密接な連携が、より安全な地域生活の実現に向けた新たな可能性を示している。

今後の交流

2026年3月には、ノースカロライナ大学老年内科の一行が名古屋大学を訪問し、リハビリテーション病院や訪問診療現場の視察を含むシンポジウムを実施する予定である。すでに名古屋大学を中心に進めている病棟研究 (J-HAC 研究) には、ノースカロライナ大学老年内科も



今後の研究展開について熱く議論を交わされる梅垣先生と Bastis 先生

参画しており、今後の共同解析の具体的な進め方について両施設間で検討が進行中である。名古屋大学のみならず、国立長寿医療研究センターをはじめとした関連施設の協力を得て、研究体制は国内の複数の老年内科病棟を

巻き込む形で発展している。今後も国際交流を一層深化させ、日本の老年医学の発展に寄与することが期待される。